



TITLE:

ミステリーとしてのタイムトラベル - サイエンス・フィクションを哲学する試論 -

AUTHOR(S):

佐金, 武

CITATION:

佐金, 武. ミステリーとしてのタイムトラベル - サイエンス・フィクションを哲学する試論 -. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2007, 10: 72-84

ISSUE DATE:

2007-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49637>

RIGHT:

ミステリーとしてのタイムトラベル

——サイエンス・フィクションを哲学する試論——

佐金 武

はじめに：時間旅行のサイエンス・フィクションがもたらす二重のミステリー

時間旅行を主題とする SF 作品は、知的興奮を呼び起こす二重のミステリーを読者に提供する。一つは、物語内部に展開される謎とその解明である。時間旅行のフィクションは多くの場合、探偵小説を読むときと同じだけの注意深さを読者に要求する。だからこそ、ある種の時間旅行という舞台装置のもとで、諸々の虚構的事実から物語の結末が明らかにされるときの爽快感は、名探偵が真犯人を追求するときのそれによく似ている。この点では、時間旅行のフィクションは、自己完結的な一つの閉じた物語になっている。しかし、もう一つのミステリーは、物語の時間構造と舞台装置を冷静に検討してみるときに現れる。たとえば、H. G. ウェルズの小説『タイムマシーン』が記述する時間構造と SF 的舞台装置そのものに、どこかパロディシカルなところはないだろうか。このように眺めてみると、時間旅行を扱う SF 作品は、外部の読者を巻き込む、開かれたミステリーでもあるといえる。とはいえ、秀逸な SF 作品であれば、上に述べた二重のミステリーは、別々に語られることはなく、同時進行で展開され、このことが、謎解きの快感と意外性の絡み合う、一種のカタルシスをもたらすのである。

本論の主たる目的は、いくつかの SF 作品を紹介し、タイムトラベルの虚構に纏わる哲学的な諸考察を織り交ぜつつ、これらのミステリーの分類学を提示することにある。そこで、まず第1節においては、ごく粗雑な仕方ではあるが、話題となる時間旅行の概念的明晰化に努める（ただし、本論で取り上げるいくつかの SF 作品、とりわけ、E. ブレスと J. M. グラバー監督による映画『バタフライ・エフェクト』と広瀬正の小説『エロス』には、いわゆる「タイムマシン」のようなものは登場せず、通常の SF 作品とは一線を画している）。第2節では、時間旅行のパラドクスとしてしばしば引き合いにだされる、「先祖殺し」の物語を取り上げる。次いで、第3節では、「自己論駁的な因果のループ」とは対照的な、「自己創出的な因果のループ」を主題とする諸作品を読む。そして、第4節では、「宿命論」と「時間の分岐」という対極的な二つの考え方が、時間旅行の SF 作品においてどのように描写されているのかを見る。

1. 時間旅行の概念的明晰化：我々はいかにして過去と出会うのか

SF小説に登場する時間旅行は、単なるタイムラグを引き起こすような装置ではない。たとえば、R.A. ハインラインの小説『夏への扉』に登場する冷凍睡眠^{コールド・スリープ}（身体を遠い未来にまで冷凍保存しておく装置）は、ある意味においては未来へのスキップと見なせるかもしれないが、本当の時間旅行ではないだろう。また、特殊相対性理論によれば、高速で運動する物体にとっての時間は、静止した地上の時計に遅れをとる。しかし、このようにして達成される「浦島太郎効果」を、我々の想像する時間旅行と同一視することはできない。なんととなれば、タイムトラベルの想定にとっては、時間的なズレだけでなく、時間の向きが重要だからである。つまり、時間旅行という考えのなかには、隔たった過去や未来に好きだけ行ったり来たりできるということが含まれているはずだ。

時間旅行者にとっての時間と、到着する時点から出発した時点を隔てる時間との間に、ズレや向きの違いが生じる以上、この二つが常に一致する通常の旅行の場合と同じように考えることはできない。この問題に対するひとつの応答は、メイランド(Meiland, 1974)による二次元的時間の仮説に見ることができる。これによれば、時間は一次元の直線によってではなく、二つの独立した時間的次元からなる二次元的平面によって表される。時間旅行を想定しない通常の場合は、右の図1にあるように、時間2の1時間に対して時間1が1時間の割合で傾斜するような、対角線によって表される。他方、時間旅行者の場合は、傾斜の変化する折れ線によって表されることになる。

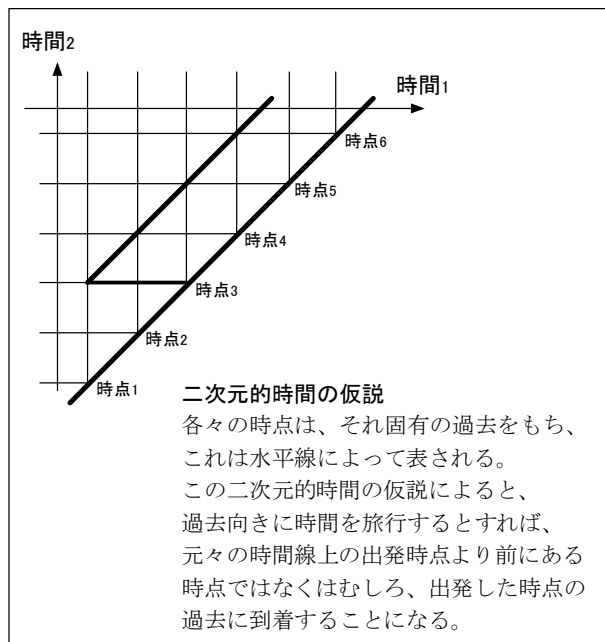


図1: 二次元的時間の仮説と時間旅行

メイランドの二次元の仮説には、一つの利点と二つの難点がある。デイントン(Dainton, 2001)は、この仮説の利点を次のように説明している。まず、タイムトラベルという考えには常に、次のような疑問が付きまとう。すなわち、過去向きの時間旅行には過去を変えるということが含まれるはずだが、パラドキシカルな帰結を導くことなく、それがいかにし

て可能か。この疑問に対して、二次元的時間の仮説は一つの答えを与えることができる。というのも、個々の時点は、水平線で表されたそれ固有の過去を持つ。そして、過去向きの時間旅行によって到着するのは、元々の対角線上の過去ではなくむしろ、出発した時点の過去である。このように考えると、時間旅行者が出発時点の水平線にある過去を変えたからといって、対角線上の歴史が変わるわけではなく、問題のパラドクスは生じない。

しかし、デイントンはまた、上の説明の直後に、二次元的時間の仮説には、これを支持する積極的な理由は存在せず、存在論的な儉約の観点から、一次元の時間のみを想定するほうが望ましいとも指摘している。タイムトラベルの科学的根拠は、K. ゲーデルが発見した、閉じた因果連鎖の存在を許すような、一般相対論の場の方程式の解である。このゲーデル的時空のなかのタイムトラベルにおいて、時間旅行者の世界線（時空を通過する経路）はあらゆる点で未来向きであるが、到達点は出発点よりも前にあることが理論的に可能である。（ゲーデル的時空の平明な解説として、Horwich(1987, Ch. 7)を参照せよ。）これと対照的に、二次元の仮説は、時間的ジャンプによってタイムトラベルが可能になるという考えに近く、このような考えに根拠を与えるような物理理論は存在しない。以上のことが、この仮説の抱える第一の難点である。

D. ルイス(Lewis, 1976)は、第二の難点を次のように指摘する。二次元的時間の仮説は、SF 小説を通じて我々が知っているようなタイムトラベルをうまく捉えられていない。SF 小説では、時間旅行者は、タイムトラベルによって懐かしいあの祖父やあの友人、また昔の自分自身に再会することができると想定されている。しかし、二次元の仮説に基づけば、時間旅行者は確かに、一方の時間的次元においては、彼らとおぼしき誰かと出会うことはできるが、他方の時間的次元においてはなお、彼ら自身と隔たっていることになる。明らかなように、ルイスの指摘する難点は、この仮説の利点と思われたものと表裏一体である。

タイムトラベルに伴う時間のズレや通常の時間の向きの逆転に対するもう一つの応答は、時間を基準系に相対化するというものである。ルイス(*ibid.*)は、二次元的時間の仮説に訴えることなく時間旅行という考えを有意味にするためには、「外的時間(*external time*)」と時間旅行者の「個人的時間(*personal time*)」という区別を設ける必要があると考えた。個人的時間とはおよそ、旅行者の腕時計あるいはその人と同じ経路にある何らかの物理的プロセスによって測られる時間である。時間旅行がその人の個人的時間で1時間を要するとき、彼の腕時計では、到着時刻は出発時刻の1時間後を指し示しているはずだ。他方、外的時間とは、たとえば地球のような、時間旅行に対して静的な観察者を含む適切な基準系によって測られる時間である。時間旅行者は彼の個人的時間で1時間を要するタイムトラベルを経て、外的時間におけるたとえば10年前や100年後に到達することができる。

個人的時間と外的時間の区別は、二次元的時間の仮説にある二つの難点をクリアしている。第一に、個人的時間と外的時間の区別は、ゲーデル的時空の考えと親和的である。個人的時間の因果のプロセス（たとえば、加齢や記憶の蓄積）は通常のごとくであって、時間旅行の過程で局所的な因果の逆転が生じたりはしない。個人的時間と外的時間はいずれも、同じ因果のプロセスにしたがうのである。第二に、二次元的仮説とは異なり、この区別を前提すれば、あのときの誰かではなく、あのときのあの人に再会するための時間旅行という考えは、自然に想定することができる。

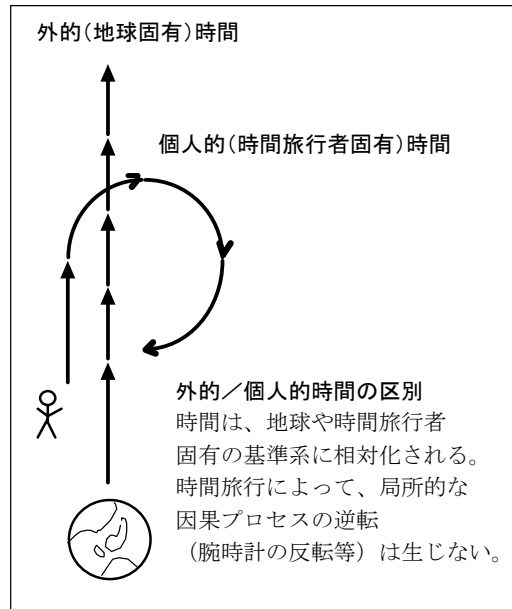


図2: 外的／個人的時間の区別

二次元的時間の仮説に対して、ルイスの個人的／外的時間の区別には以上のような強みがある。とはいえ、SF 作品に見られるタイムトラベルという考えを、一般的にどのように明確化すべきかということの、最終的な判断は差し控えたいと思う。なぜなら、まず、ルイスも認めるとおり、二次元的仮説を棄却するアプリーオリな根拠はない。また、ある種の時間旅行のフィクション（とりわけ、本論の最後に紹介する、広瀬正の短編『ザ・タイムマシン』）は、この仮説のもとで理解した方がよいと思われる。以下本論では、ここに概説した哲学的な概念枠組みを自由に使い分けて、諸々の SF 作品を見ていきたいと思う。

2. 先祖殺しのパラドクス：『Once Upon A Time Machine』

時間旅行のパラドクスの類型としてとりわけ有名な先祖殺しの物語は、古くから多くの SF ファンや哲学者を虜にしてきた。先祖殺しのパラドクスとは、結婚する前の自分の両親、祖父や祖母、あるいは幼時の自分自身を殺した場合、何が起こるかという問題である。広瀬正の『Once Upon A Time Machine』は、これをテーマとする短編である。ある日主人公の私が部屋でゴロゴロしているところへ、あなたの子孫だという曾孫が現れる。曾孫は先祖殺しのパラドクスに関心を抱いており、これを実験に移すべくタイムマシンに乗って未来からやって来たという。ところが、ウィスキーを飲みながら話しこんでいるうちに、私と曾孫の間に奇妙な友情が芽生えてしまう。そこで二人は、家系図の中から剣の達人であるセンゾを選び出し、そのまた大センゾと戦わせることを思いつく。センゾが大センゾ殺し

に成功するにせよ、返り討ちにあうにせよ、先祖殺しのパラドクスを引き起こす状況が生まれるというわけだ。結局、センゾは大センゾに致命傷を負わせることになるのだが、大センゾはその死に際、残された側近に次のようにいう。我が名は弟につがせ、我が許嫁をめあわせて、家名の絶えることなきよう、そして、この度のことは一切他言無用である、と。先祖殺しの命題に対する、私と曾孫の答えはこうだ。私曰く、「大センゾに弟があったとはね。家系図にはのっていないかったな」。答えて曾孫曰く、「違いますよ。大センゾには……曲者に殺された兄があったのです」……。

主人公の私は、先祖殺しの試みは失敗したと考える。他方、曾孫は、自分たちが関わった一連の出来事は、殺すべき相手に実は兄がおり、この兄は曲者によって殺されたという歴史的事実の原因だったと考える。確かに、物語の最初に語られる、私と曾孫による先祖殺しの試みは、外的時間においては、本当の大センゾの兄が曲者に討たれたことの未来に位置するゆえに、前者は後者の結果であるように見える。しかし、個人的時間においては、二人の試みは、実の大センゾの兄を殺してしまったことの過去に位置する出来事であるから、前者は後者の原因でもある。かくして、先祖殺しの試みは、「歴史の自己補修」とでもいいうる仕方で幕を引く。この物語の結末に呟かれる、二人の回答のどちらも正しい。つまり、先祖殺しの試みは失敗したのだが、その試みがなければ、大センゾの兄が曲者に討たれたという歴史的事実は存在しなかったはずである。

ここで、別の遠近法を駆使して、物語が提示する第二のミステリーを考えてみよう。そもそも、先祖殺しのパラドクスといわれるものには、論理的矛盾が含まれているのだろうか。タイムトラベルが論理的に不可能だと考える論者は、上の先祖殺しの例を用いて、以下のような議論を展開するだろう。

先祖殺しの論理的矛盾

- (1) 時間旅行が可能だとすれば、私と曾孫による先祖殺しの試みは失敗に終わったが、少なくともそれは可能だったはずである。
- (2) しかし、先祖殺しが可能であれば、私と曾孫は試みに成功することもありえ、そのとき二人は存在しなかったはずだ。
- (3) 私と曾孫は存在する。
- (4) よって、先祖殺しは不可能である。
- (5) よって、時間旅行が可能だとすれば、先祖殺しが可能かつ不可能であるという論理的矛盾が導かれる。

ルイス(*ibid.*)によると、上の議論はうまくいっていない。彼は、この議論で主張される「可能性」と「不可能性」の文脈の揺らぎに着目する。確かに、通常の文脈では、何らかの阻害要因（邪魔者の存在や凶器の不具合、加害者の手際が悪いことや勘違い等々）がない限り、殺人は可能である。これと同様にして、先祖殺しが「可能」と考えることに一見問題はないように思われる。しかし、先祖がいなければ、私と曾孫は存在しえないのであるから、先祖殺しはやはり「不可能」である。だが、ここで重要なことは、これらの「可能性」と「不可能性」に関わる文脈に、劇的な変化が起こっているということだ。単に阻害要因がないとされる文脈での「可能性」は、阻害要因がないことに加えて、被害者が加害者の先祖であるという事実から構成される別の文脈での「不可能性」と区別しなければならない。時間旅行は論理的矛盾を含むと主張したい論者は、通常の文脈における殺人の「可能性」を根拠にして、(1)を前提している。他方、タイムトラベルという状況下での先祖殺しは特殊な文脈であるゆえに、この文脈での「不可能性」は、通常の文脈での「可能性」の単なる否定と考えることはできない。こうして、ルイスは、一見したところの論理的矛盾は、実際には、曖昧さによる暗黙裏の文脈のシフトに起因すると診断する。

広瀬の『Once Upon A Time Machine』は、ルイスの指摘する文脈のシフトを効果的に利用している。二人は、タイムマシンに乗って先祖殺しを企んだ。そして、センゾか大センゾのどちらかが殺されるような状況（つまり、先祖殺しが成功を収める可能性が相当高い状況）の下で、二人が目星をつけていた大センゾが袈裟がけに切られてしまう。ここに、文脈のシフトが差し挟まれる。つまり、これまでの物語の文脈に、「本当の大センゾは大センゾの弟である」という事実を付け加えると、物語は整合的に幕を閉じることができる。このような文脈のシフトが、歴史的事実そのものの変化なのか、単に認識的な変化なのか、それは完全には明らかではないが、物語は、後者の読みを示唆しているように思われる。つまり、物語の始まりから終わりまで事実的なレベルでの文脈のシフトはないが、「本当の大センゾは大センゾの弟である」という事実を二人が知らなかったことに起因する、認識上のギャップによって、先祖殺しの失敗は説明されているように思われる。そして、この失敗こそが、「大センゾの兄は曲者によって殺された」という歴史的事実の原因であったことも明らかになり、パズルは完成する。

もしも私と曾孫が「本当の大センゾは大センゾの弟である」と知っていたとすれば、物語の結末はどうなっていたのかと考えてみると面白い。確かに、タイムマシンを使って、自己矛盾的な何事かすることは不可能である。もし私と曾孫が実の大センゾ殺しに成功したとすれば、有無をいわず論理的矛盾が生じる。したがって、何度先祖殺しを企てても、それは必ず失敗する。このような失敗が、矛盾を許容しない論理の力によるのではな

いことは明らかだ。論理の力で殺人を防ぐことなどできない。したがって、二人の試みが挫かれるのは、予期せぬ何らかの非論理的な阻害要因がある場合のみである。

ホーウィッチ(Horwich, 1987, Ch.7)は、このことの奇妙さを次のように述べている。時間旅行が生じる状況と関連した、無限に続く失敗の系列は、非常に驚くべき偶然の一致である。そのような偶然の一致はめったに起こらないという我々の経験からすれば、先祖殺しの試みが繰り返し失敗するということは極めて起こりそうにないので、むしろ先祖殺しの試みはまれであると考えの方が理に適っている、と。しかし、彼は、先祖殺しの試みがまれであるのは、時間旅行が原理的に不可能だからだと結論することは性急であると考え。時間旅行が原理的には可能な、ゲーデル的時空が存在するという前提のもとでも、たとえば、矛盾を引き起こす類の、時空的に近いところへのタイムトラベルに要する燃料が膨大過ぎるため、先祖殺しの試みはまれであると説明することはできる。局所的な時間旅行に必要なエネルギーが膨大過ぎて、我々がそれを利用できず、このゆえ、先祖殺しの試みがまれであることは、タイムトラベルの原理的可能性を消去しないのである。

3. 自己創出的な因果のループ：『マイナス・ゼロ』、『輪廻の蛇』

仮にゲーデル的時空が存在し、タイムトラベルに要するエネルギーの問題が解決されても、私は自分の祖先を殺すことはできない。時間旅行に際して、私が明確に先祖殺しの意図を持っていたとすれば、度重なる失敗は偏に「偶然の一致」の所以ということになるだろう。このような偶然の一致は、奇跡と呼ばないにしても、やはりミステリアスだ。問題の発端は、自己論駁的な因果のループが存在するかどうかということであつた。ルイスもホーウィッチも、因果のループそのものの非存在を示すアプリオリな理由（因果のループという考えそのものに、ある種の論理的矛盾が含まれるというような根拠）はないと考えた。つまり、因果のループはそれ自体としては、自己論駁的ではない。さらに、ホーウィッチは、自己論駁的な出来事が起こらないことは、因果のループの非存在に訴えなくとも、これと独立の何らかの根拠による説明を期待してよいと示唆したのである。しかし、目下の想定では、エネルギー問題や、その他これに類する障害は取り除かれていると考えている。そのような想定の下で、自己論駁的な因果のループが生じないということは、全くの偶然の一致による失敗の他に、これを説明する方途がないように思われたのである。ここで、問題を逆転させ、自己創出的な因果のループは可能かと問うてみたい。歴史的自殺の物語に代えて、次の話題は、歴史的自己出産の物語である。

広瀬正の『マイナス・ゼロ』は、彼の作品のなかで最も定評のある長編小説である。そのなかには、次のようなトリックが用意されている。（ミステリーの結末をばらすようなマ

ネは本意ではないが、行き掛かり上やむを得ない。この小説には、他にも目を見張る仕掛けが至る所にちりばめられているし、何よりも彼の文章は読ませるので、一つ種明かしをしても、作品の価値をそれほど貶めないと信じている。) 浜田俊夫の子を身ごもった伊沢啓子は、時間を超え彼を追いかけて、昭和2年の梅ヶ丘を彷徨っていた。生活上の苦難から、彼女はその娘を孤児院に残さざるを得なかったが、やがては小田切美子の芸名で映画女優として活躍し、新聞や雑誌を賑わすまでになった。ある親切な先生の養子となった美子の娘は啓子と名付けられ、彼女は近所に住む幼少期の俊夫の憧れの的だった。時は経ち終戦になって、美子は、啓子が義理の父と一緒に死んだときいて、すっかり気落ちしてしまう。しかし、実のところ、啓子は空襲で亡くなってはいなかった。幼いころの憧れのため、戦中の苦難から彼女を解放すべくやって来た、昭和37年の俊夫に連れられて、彼の現在へ旅立っていたのである。こうして、啓子の物語は振り出しに戻る。再び昭和37年、美子として人生を送っていた啓子は、ことの真相に気づいて、次のようにいう。「あたしが、伊沢啓子だったのね。国立の孤児院で育って、お父様の養子になって、タイム・マシンで昭和37年へ行って、啓子を生んで、啓子を国立の孤児院の前に捨てて……。あの子が、あたしだったんだわ。そうして、あたしがあの子を……。あたしは……」……。

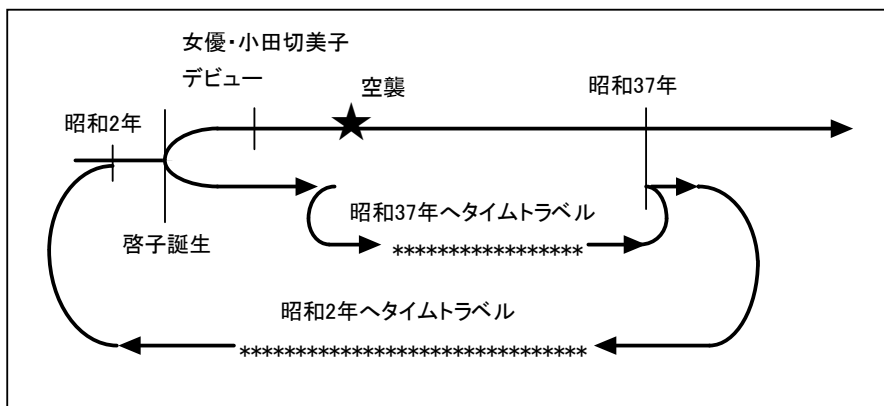


図3:『マイナス・ゼロ』啓子と美子の歴史

自己創出的な因果のループというテーマを扱った古典的作品では、ハインラインの『輪廻の蛇』は、おそらく SF 史上最もグロテスクな短編である。(ハインラインはこの作品において、文飾を極力廃し、ストイックなまでに時間旅行の不条理を描き出そうとしているように見える。) ジェーンは、生後一ヶ月にして、1945年のとある孤児院にいる。1963年、彼女は見知らぬ男に誘惑され、1964年に娘を授かる。その際、産婦人科医は、ジェーンの身体が完全に二組の性器をもっていること、つまりは彼女が両性具有であることに気づく。

彼女の女性としての機能は既に失われていたので、医師は彼女を男性につくりかえてしまう。さらに追い打ちをかけるように、ジェーンの赤ん坊は何ものかによってさらわれる。その後、男性となったジェーンは、コラムニストとして生計を立てていたのだが、1970年、あるバーテンダーが彼に話しを持ちかける。彼は、不幸の元凶であるその男に会わせてやるという、男性のジェーンを1963年のあの場所へと連れて行く。彼は1963年のジェーンと恋に落ち、彼女の母胎に生命が宿る。その数日後、再び現れたバーテンダーは、男性のジェーンを航時局の一員とするため、共に1985年へと旅立つ。1970年、コラムニストのジェーンに話しを持ちかけた、バーテンダーとは、航時局員となったジェーン自身だった。一方、ジェーンの娘は、彼自身の手によって、1964年の病院から1945年の孤児院へと移される。こうして、すべては、一つの世界線を形成する……。

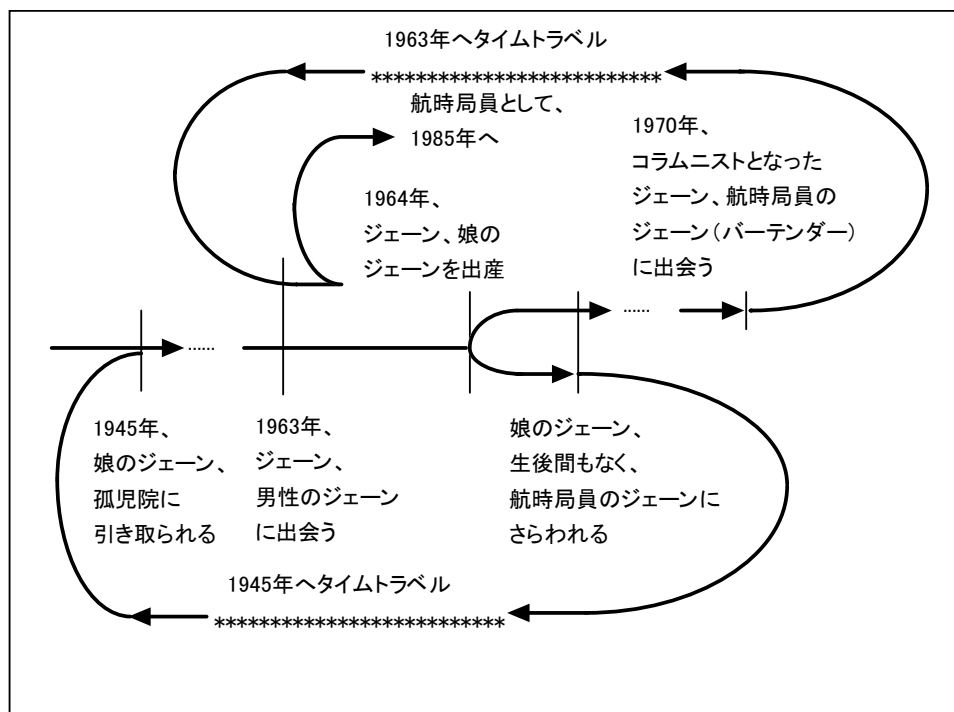


図4:『輪廻の蛇』ジェーンの歴史

上の二つのフィクションは、現実的には極めて意外な自己創出という物語が、因果のループがあれば可能になることを示している。通常的人格形成に照らして考える限り、自分の子どもが自分だということは想像し難しい。人格の同一性にとって心理学的なつながり(記憶や好みなど)がその要件であるとする、哲学者にはお馴染みの見解に訴えなくとも、

子どもを身ごもった自分とその子を出産した自分が同一人物であることを、誰も疑わない。他方、自分と生まれた子供の間には、いかなる心理学的なつながりも見当たらず、自分たちは同一人物ではないと考えるのが普通だろう。啓子と美子、ジェーンとその娘であるジェーンの場合も、出産という出来事の直後では同一人物ではない。ところが、長い因果のループを辿っていくと、二人はだんだん同じ人物になっていく。このような状況は、グロテスクな印象を与えるばかりでなく、我々の目にはとても奇異に写ることは確かだ。

二つの物語のなかで起こる個々の出来事は、局所的には、我々が普通に経験するありふれたものであって、起こらないこともあり得たような、偶然のように見える。そして、ひょんな巡り合わせの結果、誰かが生まれることは、多かれ少なかれ、我々自身についてもそういえるし、とりたてておかしいことではない。(ただし、自己創出的な物語において、親と子は同一人物であるがゆえに、同じ遺伝子をもたねばならない。このような状況は、理論的には不可能ではないにせよ、その可能性が極めて低いことは注意しておくべきだ。)

この物語の真の不思議さは次の点だ。我々の誕生は因果のループを必要としないが、美子とジェーンの場合、自己創出的な出来事の系列が不可欠で、諸々の偶然的な出来事は、このための因果の円環的連鎖が断ち切られないことがないような仕方で配置されねばならない。既述のように、自己創出的な因果のループが形成される過程は、局所的には偶然に見える。(しかも、親と子の遺伝子配列が同じであることまで考慮すると、かなりまれな偶然である。)ところが、一度美子やジェーンが自ら誕生したという虚構的事実を物語の文脈に組み入れると、この円環構造を破るような出来事は、決して起こりえないことになる。因果のループがなければ、二人はそもそも存在しない。しかし、物語の設定上、二人は存在し、ループが破られると直ちに論理的矛盾が帰結する。この因果のループを断ち切る仕方は無数に考えられるが、彼女らが存在する限り、出産と出生に至る輪廻からは逃れられない。ここに、無限回の先祖殺しの失敗に匹敵する、驚くべき偶然の一致が要請される。

ハインラインの物語は、ジェーンの次のような象徴的な言葉で締めくくられている。「おのが尾を呑む蛇、永遠に絶えぬ輪廻.....私は自分がどこから来たのか知っているが、おまえたち生き変わり死に変わりして現れる死霊どもは、どこから来たのだ」。我が存在する、ゆえに因果のループあり。偶然から生まれた宿命。美子とジェーンは存在する以上、無為に過ごすことさえ許されず、必ずこのループを完成する運命にある。したがって、自己創出の物語が全体として宿命論的な様相を呈することは、不可避であるように思われる。

4. 宿命論と時間の分岐：『12 モンキーズ』、『バタフライ・エフェクト』、『エロス』

時間旅行の舞台装置を取り入れた SF 作品の多くは、物語の設定上、宿命論的な原理に

支配されている。しかし、そうでなくてもよいような時間旅行のフィクションもあるだろう。テリー・ギリアム監督の映画『12 モンキーズ』（1995 年米）は、宿命論的な原理に支配される必要がないような、純粋に宿命論的な物語の一例である。20 世紀末、人類は、謎のウイルスによって地下での生活を余儀なくされた。やがて 21 世紀の科学者集団は、囚人ジェームスを時間旅行者に選び、ウイルス発生の原因を突き止める任務を彼に与える。彼は、二つの時代を行き来し、様々な出来事に巻き込まれつつ、歴史の謎に翻弄される。あるとき、ジェームスは、「12 モンキーズ」と称するカルト集団がどうやら、ウイルスを撒布したテロリストではないかと推測するに至る。このカルト集団のリーダーであるジェフリーの父は、世界的な細菌学者であった。また、ジェームスは、最初のタイムトラベルで過去へ送られたときに知り合った、ジェフリーへの自分の干渉のために、すべての惨劇が起こったのではないかと思い悩んでもいる。しかし、実際には、「12 モンキーズ」とウイルスは無関係であり、真犯人は別のところにいる。これに気づいたときには既に遅く、不運なミスマッチによって、ジェームスは警官の発砲した銃弾に倒れ、結局真犯人は逃げ延びてしまう。このラストシーンは空港での出来事で、たまたま両親と現場に居合わせた幼少時のジェームスは、自分の死を目撃してしまう。彼が幼い頃から同じ悪夢に苛まれねばならなかったことの理由は、このトラウマによるものと、物語は暗示しているように見える……。

自己創出的な因果のループの場合とは異なり、この物語の設定を考えると、空港でのジェームスの死が、運命づけられていなくてもよかっただろうと思う。主人公のジェームスが、首尾よく真のテロリストを突き止め、あとは 20 世紀に出会った恋人とハッピーエンドを迎えるという結末も、(映画としては退屈かもしれないが) ありうる選択肢だろう。そのときには、人類の絶望的な未来についてのジェームスの記憶の大部分が、どういうわけか誤りであるということになるが、そうであってはならない理由はない。ギリアムの映画が宿命論的色彩を帯びているのとは対称的に、E. プレスと J.M. グラバー監督の『バタフライ・エフェクト』（2003 年米）は、時間の分岐を物語の構造とした SF 映画である。主人公のエヴァンは、幼い頃、記憶障害を患っていたため、治療として日記をつけることにしていた。やがて大学生となったエヴァンの記憶薄弱は完治していたが、ある日、奇妙なことが起こる。幼い頃の日記を読むと、まさにそのときの時間の分岐点からすべてをやり直すことができってしまうのである。エヴァンは、彼が恋心を抱くヒロインや、大切な友人の幸福な人生を回復するため、何度も過去をやり直そうとする……。

個々の分岐における時間的にローカルな部分での幸福は、一つの枝の人生全体の文脈におかれたとき、単純に比較選択できるようなものではない。しかも、選択の可能性は無数

にある。このことが、エヴァンが何度も過去をやり直さなくてはならない理由である。広瀬の長編『エロス』もまた、同様のことを絶妙な仕方でも描き出している。しかし、ここでこの物語の拙い説明をすることは止めにしておこう。(ちなみに、『エロス』は、よく目にするタイプの時間旅行の SF 小説ではないが、最後にささやかな意外性もちゃんと用意されている。興味のある読者は、自分でこれを確かめて欲しい。)

5. おわりに：タイムマシンの作り方

さて、我々の SF 分類学は、先祖殺しのパラドクスから、自己創出的な因果のループへと、そして宿命論と時間の分岐という二つの考えの緊張関係へと、三つのミステリー圏を横断してきた。しかし、我々の目的は、時間旅行をめぐる謎の解決ではなくむしろ、それをミステリーとして提示することであった。最後に、時間の分岐という考えに潜むミステリーを投げかけるため、もう一つ SF 作品を紹介して本論を締めくくりたいと思う。

広瀬正の短編に、『ザ・タイムマシン』という作品がある。この物語は、ムテン博士の講演会という形式をとって語られ、ストーリーに隠されたミステリー(冒頭に述べた第一のミステリー)もさることながら、タイムトラベルという考えそのもののミステリー(第二のミステリー)に読者を誘うことこそ、作家広瀬の目論見と思われる。この作品のある箇所、次のような件がある。「じつは、この方も未来の世界からタイムトラベルをしてこられたのです」といってムテン博士は、傍らに立つ青年を紹介する。青年は、時間旅行者たちが過去を変えてしまわないように監視する、タイムパトローラーの一員で、彼の歴史によると、ムテン博士は昨日死ぬはずだったという。ところが、諸々の事情があつて、彼は任務の遂行に失敗し、博士は今日も元気に生きている。青年は思い詰めてしまい、自殺まで考えるが、博士はこう説得する。過去が変えられてしまったということは、君が来た未来の世界も変わってしまったということである。青年は上司である長官からひどく咎められるだろうと心配しているが、歴史が変わったのは、長官が生まれる遙か昔の数百年前だ。その後、長官が無事誕生したとしても、彼にとって歴史は変わっていないことになるのではないか。確かに、青年にとって、この世界は、歴史が変わった昨日の時点で一つの分岐から別の分岐へとそっくり引越したかのように見える。しかし、青年はこの分岐の未来において長官に迎えられ、「過去が変えられるのをよく防いだ」ということで、報酬さえ受けるだろう。これを敷衍すれば、長官が存在するどの分岐においても、すべてのタイムパトローラーは必ず任務を果たして帰ってくる。長官自身が任務に当たらない限り、時間の分岐の引越しを目撃することはできない。だから、タイムパトロールはそもそもムダではないか……。

博士の話にはまだ続きがある。哀れな青年は、歴史が変えられることがないよう未来の世界から監視にやって来たが、彼がムテン博士のすむ世界にやって来た時点で既に、この歴史を選択していたのであって、世界の引っ越しなど起こらなかったと考えることもできる。すべては青年の記憶違いということになり、彼がやって来たと信じている未来は存在しない。したがって、この分岐の未来にある長官こそ長官その人であり、彼は青年の任務遂行を労ってくれるはずだし、青年は無条件に、元の世界に戻って来たことを喜ばばいいのだ。しかし、—— 「あつ、さっき、きみは、タイムパトロールなんてナンセンスだといったね。そのことも、もう一度検討してみる必要がある。もう一度ゆっくり、長官、タイムパトロール隊員、無責任なタイムトラベラーの、それぞれの観点から考えてみたまえ。これは宿題だ」。

文献

- ウェールズ, H. G. (2002). 『タイムマシン』 (石川年訳), 角川文庫.
ハインライン, R. A. (1982). 『輪廻の蛇』 (井上一夫訳), 表題『輪廻の蛇』, 早川書房.
—— (1979). 『夏への扉』 (福島正実訳), 早川書房.
広瀬正 (1982). 『エロス (広瀬正・小説全集3)』, 集英社.
—— (1982). 『ザ・タイムマシン』, 表題『タイムマシンの作り方 (広瀬正・小説全集6)』, 集英社.
—— (1982). 『マイナス・ゼロ (広瀬正・小説全集1)』, 集英社.
—— (1982). 『Once Upon A Time Machine』, 表題『タイムマシンの作り方 (広瀬正・小説全集6)』, 集英社.
Dainton, B. (2001). *Time and Space*, Acumen, Chesham.
Horwich, P. (1987). *Asymmetries in Time*, MIT Press, Cambridge MA. (1992, 丹治信春訳, 『時間に向きはあるか』, 丸善.)
Lewis, D. (1976). 'The Paradoxes of Time Travel', *American Philosophical Quarterly* 13, 145-52.
Meiland, J. W. (1974). 'A Two-Dimensional Passage Model of Time for Time Travel', *Philosophical Studies* 26, 153-73.

* 本論で扱った映画作品は文中を参照。

〔哲学博士課程〕